

# 兜 塚 古 墳 2

—飯氏古墳群A—1号墳 墳丘確認調査—

2005

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、特に重要性が指摘できる遺跡について一部発掘調査を行い、その内容確認に努めて参りました。

本書は平成15年度に行いました、飯氏A—1号墳（兜塚古墳）の墳丘確認調査について報告するものです。この調査では、墳丘の築造過程や形態について考察する上での、重要な情報を得ることができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にあたり御協力いただきました、地権者の方々をはじめとする地元飯氏地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木とみ子

### 一例 言一

- ・本書は2003年6月13日～2003年7月8日にかけて行った、飯氏古墳群A—1号墳（兜塚古墳）第2次調査の報告である。調査は藤富士寛が担当した。
- ・本書で使用した遺構実測図は担当者の他、天野玄智氏が作成した。
- ・本書使用の標高は海拔高、方位は国土座標による座標北である。
- ・本書の執筆・編集は藤富士寛が行った。また、遺物の実測には下原幸裕氏（福岡大学大学院生）の手を煩わせた。
- ・本書に関する資料はこの後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

## 目 次

Iはじめに .....	1
1. 調査にいたる経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
II兜塚古墳とその周辺 .....	2
1. 周辺の状況 .....	2
2. 今宿古墳群 .....	2
III調査の記録 .....	4
1. 調査の目的 .....	4
2. 各トレンチの調査 .....	4
3. 出土遺物 .....	9
IVまとめ .....	11

## 挿図目次

- 図1 今宿古墳群 (1/40,000)  
図2 兜塚古墳とその周辺 (1/5,000)  
図3 古墳の現況 (杉山編 1996 より) とトレンチ配置 (1/400)  
図4 1トレンチ (1/60)  
図5 2トレンチ (1/60)  
図6 3・4トレンチ (1/60)  
図7 1トレンチ出土遺物 (1/4)  
図8 2トレンチ出土遺物 (1/4)  
図9 調査結果 (杉山編 1996 に加筆) (1/400)

## 図版目次

- 図版1 上 墳頂部現況 (北東から) 下 3トレンチ発掘前現況 (北から)  
図版2 上 1トレンチ完掘状況 (北から) 下 1トレンチ検出葺石 (北から)  
図版3 上 2トレンチ完掘状況 (西から) 下 2トレンチ検出葺石 (西から)  
図版4 上 3トレンチ土層 (西から) 下 4トレンチ土層 (南から)

## I はじめに

### 1. 調査にいたる経緯

兜塚古墳は、貝原益軒『筑前國續風土記』の記述にもあるように、古くから良く知られた古墳である。福岡市教育委員会では、今宿古墳群の内容確認の一環として兜塚古墳の発掘調査を行い、墳丘および主体部の状況を明らかにした。その成果は発掘調査報告書として既に周知されている（杉山編 1996）。

この後、今宿古墳群の保護・活用を見据え、福岡市教育委員会では今宿古墳群の国指定史跡としての申請を目指すこととし、今宿古墳群内の主要古墳について、再度の内容確認を行うこととなつた。まず前方後円墳である飯氏二塚古墳の再確認調査が、2002年11月15日から2003年1月15日にかけて行われ、墳丘や主体部（横穴式石室）に関する更に多くの知見を得ることができた（吉武編 2003）。

兜塚古墳についても、再確認調査の実施に向けて地権者や周辺住民への説明を行い、調査に対する御理解を求め、関係部局との協議を重ねた。そしてすべての準備が整え、2003年6月13日より調査を開始し、同年7月8日、すべての調査を終了した。

調査に当たっては、地権者である久保山荒次郎氏や周辺住民の方々には多大な御協力を戴いた。記して感謝申し上げたい。

### 2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 調査第1係長 力武卓治

事前審査 文化財部埋蔵文化財課 事前審査係長 池崎謙二

庶務担当 文化財部文化財整備課 後藤泰子

調査担当 文化財部埋蔵文化財課 藏富士寛

調査作業 天野玄普 石川正志 犬童陽子 久保靖男 末松美佐子 富永謙夫 徳安勝也

馬奈木留雄

整理作業 大山智美

遺跡調査番号	0 3 2 5		遺 蹤 略 号		IJK-A-2
地 番	西区大字飯氏字松尾 630 他		分 布 地 図 記 号		121 飯氏
開 発 面 積	-	調査対象面積	-	調査面積	25.4m <sup>2</sup>
調 査 期 間	2003年6月13日～2003年7月8日				

## II 兜塚古墳とその周辺

### 1. 周辺の状況

兜塚古墳は、高祖山から北へ派生する標高40m程の低丘陵上に存在する(図1)。兜塚古墳の周辺は独立した高まりを形成しており、南側には5基の古墳が散在する(飯氏古墳群A群)。4・5号墳(子捨塚古墳:双円墳である可能性も高い)をみる限り、これら古墳は古墳時代後期に位置づけることができるだろう。兜塚古墳は福岡市における遺跡分布地図上では、飯氏古墳群A-1号墳とも表記される。兜塚古墳の西側、浅い谷を挟んだ200m程先には飯氏二塚古墳がある。全長49.6mを測る前方後円墳で、主体部には横穴式石室を有し、石室構造や出土遺物をみればMT15型式期に位置づけることができる(常松編1995、吉武編2003)。また、南東側丘陵上には飯氏古墳群の諸群が展開しており、谷を隔てて向かいあう飯氏古墳群B群内には、小規模な前方後円墳である飯氏B-14号墳(墳長24.5m)が存在する(米倉編1998、久住庵1999)。飯氏古墳群B群は古墳時代後期を中心とする古墳群であるが、丘陵裾付近の低地に展開するいくつかの古墳等、若干遡る可能性のあるものも含まれる。

### 2. 今宿古墳群

博多湾に面し、現在の福岡市今宿~周船寺地域に広がる沖積低地は通常、今宿平野と呼ばれる。その今宿平野の南端、東端に相当する高祖山北麓や長垂丘陵の西麓には、総数300基を超える古墳の存在が知られている。これら古墳は総称して今宿古墳群と呼ばれ(図2)、14基の前方後円墳を含む<sup>(1)</sup>。今宿古墳群は東西3kmという広範囲に渡って存在し、古墳時代のほぼ全期間を通じて古墳が営まれているため、実体としては複数の小群に分けて把握すべきであるという考えがいくつか示されている(常松1995、柳沢・杉山2002など)<sup>(2)</sup>。この内、柳沢一男氏は、1) 飯氏地域における兜塚古墳-飯氏二塚古墳の築造時には、今宿地域では今宿大塚古墳が存在すること、2) 飯氏地域出土と伝えられる石鏡の存在から、今宿地域における山ノ鼻1号墳から鋪崎古墳築造の間に、飯氏地域において大形墳が営まれていた可能性があること といった根拠から、飯氏地域と今宿地域それぞれの首長墳を別系譜のものとして捉えるべきだという見解を示し、それそれを飯氏小グループ、今宿小グループと呼称している。

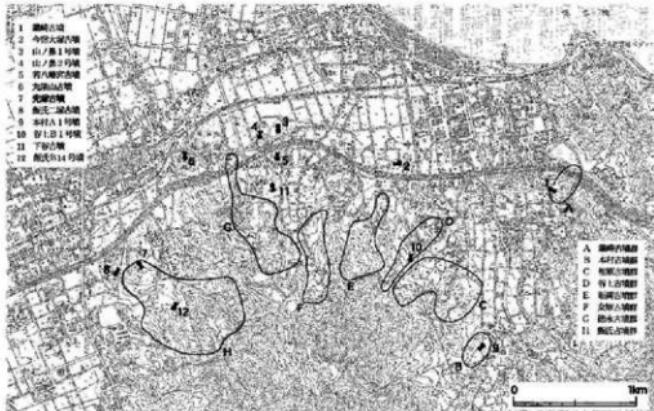


図1 今宿古墳群 (1/40,000)

このように、調査や研究の進展は今宿古墳群の内容を次第と明らかにしつつあるが、これからは大形前方後円墳だけではなく、後期を中心とする群集墳個々の動向も加味していくべきであるし、その群中に現れた小前方後円墳（谷上B-1号墳、飯氏B-14号墳など）や、2重の環濠を巡らし從前からの系譜（兜塚古墳-飯氏二塚古墳）とは位置や規模を進えて出現する今宿大塚古墳の位置づけなどは、今宿古墳群という小地域にとらわれるのではなく、より広範な地域の状況を踏まえて評価する必要があるのかもしれない。今宿古墳群は福岡市内でも他に例を見ないほど、前方後円墳を含む多くの古墳が広範囲に渡って良好に残された地域である。今後の保存・活用や上述した問題の解決の為にも早急な全容解明が望まれる。

#### 註

- (1) この内、下谷古墳、本村A-1号墳は既に破壊され、山ノ鼻2号墳、飯氏鏡原古墳、女原C14号墳は詳細が不明である。
- (2) 今宿古墳群の変遷については、他に次の文献（久住編 1999、菅波編 1997、吉留 2000）に詳しい

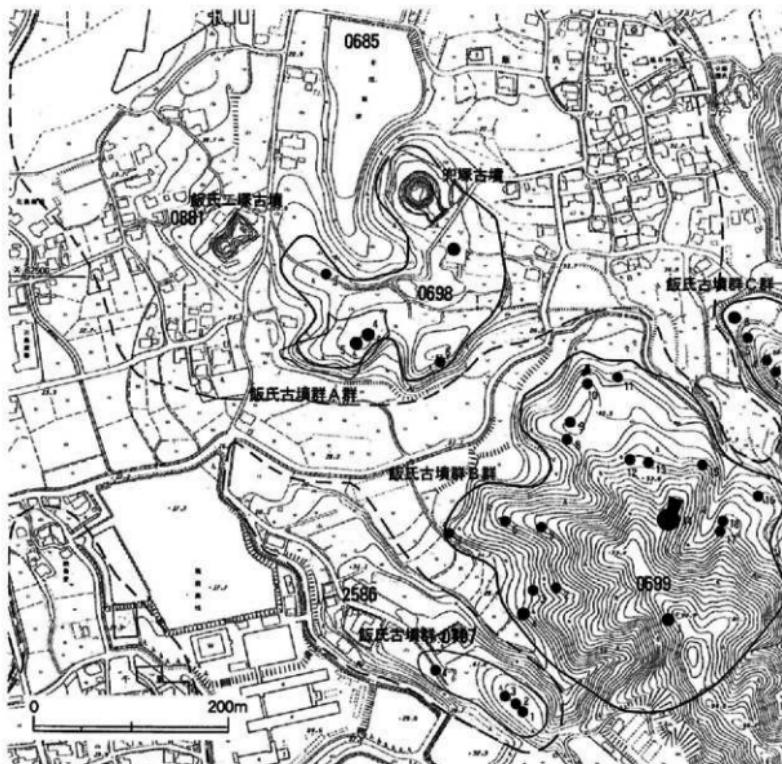


図2 兜塚古墳とその周辺 (1/5,000)

### III 調査の記録

#### 1. 調査の目的

兜塚古墳について、福岡市教育委員会では、古墳の規模や構造解明を目的としたトレンチ調査を1994年12月から1995年3月にかけて実施している。その結果、以下の所見を得ることができた(杉山編1996)。

- 1) 墳丘長 $53\text{ m} + \alpha$ 、後円部径 $43\text{ m}$ を測る前方後円墳であること。
- 2) 主体部は初期横穴式石室(北部九州型石室)であること。
- 3) 圓筒埴輪や須恵器、鐵鏃等の出土遺物から、「5世紀後半代のより新しい時期」に位置づけることができる

以上の成果を踏まえ、今回の調査に当たっては次に挙げる目的を設定し、調査を行った。

##### 1) 墳丘形態の確認

前回調査において十分な所見を得ることのできなかった、前方部の形態、および後円部南西側の裾部を明らかにすること。

##### 2) 墳丘築造過程の解明

墳丘頂部およびテラス面の掘り下げを行い、地山整形の状況等、墳丘や横穴式石室築造の状況を解明すること。

調査に先立ち、まず周辺の伐採を行って墳丘の表面観察を行った。前回調査時に比して、墳丘の状況に変化はなく、後円部裾はきれいな円形を描いていた。ただ、墳丘では平坦面が異様に広く、天井石を含めた横穴式石室の石材が存在する部分にのみ、残丘状に墳丘が残されている状況をみれば、前回調査の所見が示すように、墳丘自体に相当の改変が施されていることは容易に想像できる。この観察において埴輪片を表探することはなかった。

また前方部は、その先端が削り取られ崖状を呈しているのを始め、東側では畠の開墾により裾部が大きく削り取られ、西側および上面では近・現代墓が建ち並ぶといった状況であり、トレンチといった小規模な調査では、その形態把握は困難であると判断した。従って、目的1)における前方部形態の確認という目的を断念し、他の目的解明のため、図3に示す1~4のトレンチを設定し、調査を開始した。

#### 2. 各トレンチの調査

以下に各トレンチの所見について記す。

##### 1トレンチ(図4、図版2)

後円部の北側裾部に設定した長さ $9.2\text{ m}$ 、幅 $1\text{ m}$ のトレンチである。周辺には多くの近世墓が存在し、トレンチ内においてもいくつか認めることができたが、完掘はせず多くは検出のみに留めている。表土を除去した後、トレンチ南端から $1.6\text{ m}$ までの範囲に礫群を検出した。この礫群は地山を削り出した斜面上に存在しており、この地山の削り出しが墳丘裾部、そして礫群が葺石に相当するのだろう。検出した上半部の葺石は失われ、裾端部は近世墓により擾乱を受けているが、地山の傾斜をみれば、現況における葺石の端部(トレンチ南端より $1.6\text{ m}$ の地点)がほぼ墳丘裾端部に当たると考えて良い。葺石石材はすべて花崗岩で、裾付近の石材はやや小振りであるが、これは裾部にやや大形の基底石が配されていたためであろう。石積みの目地は墳丘ラインに対して斜行して走る。葺石部分から北側のトレンチ内では、7基の近世墓によりいくらかの擾乱は受けているものの、地山の平坦面が続く。

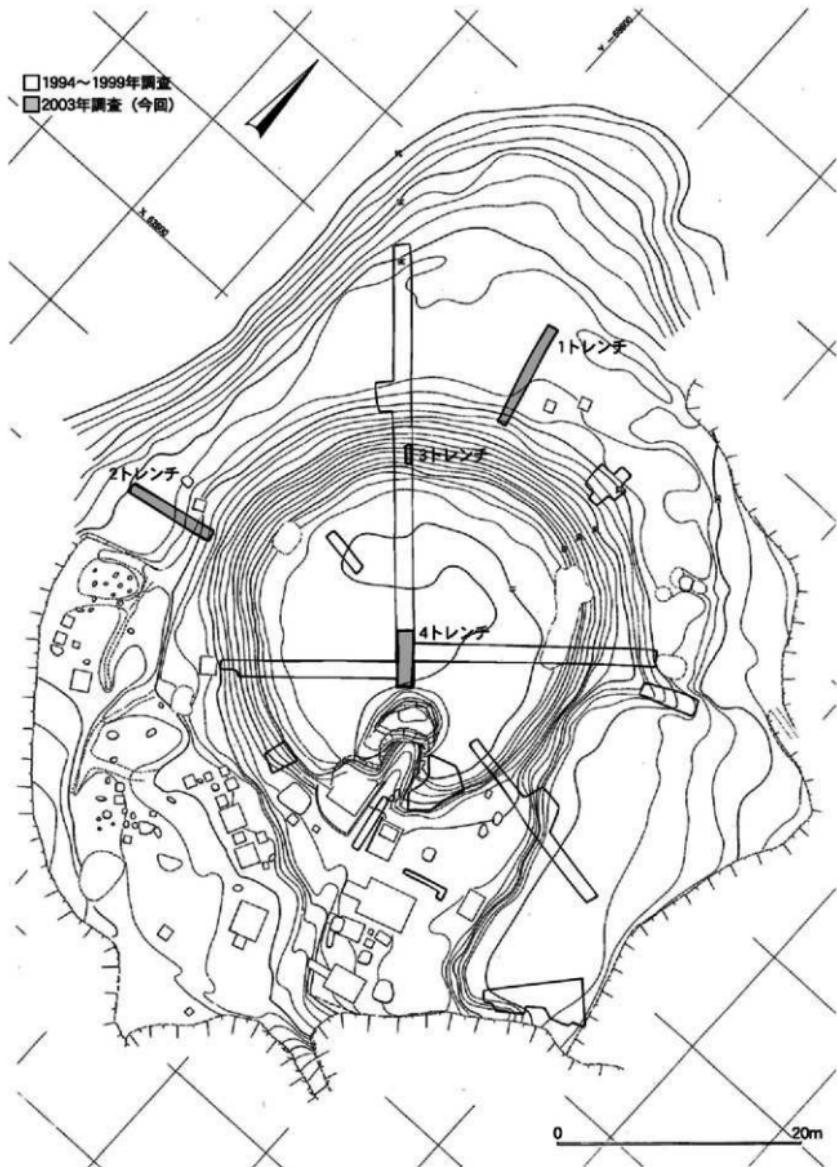


図3 古墳の現況（杉山編 1996 より）とトレンチ配置（1/400）

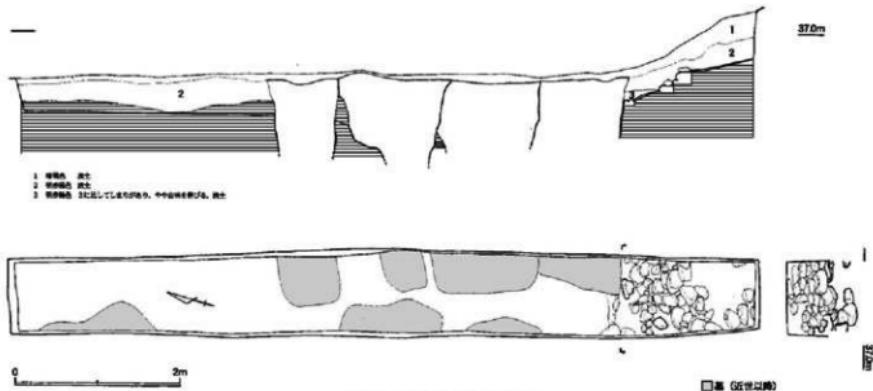


図4 1トレンチ (1/60)

出土遺物(図7) コンテナ1／2箱程の遺物が出土している。ほとんどが埴輪片であるが、その中に須恵器が1点のみ存在する。

#### 2トレンチ(図5、図版3)

後円部の西側裾部に設定した長さ8m、幅1mのトレンチである。1トレンチと同じく、トレンチ東端から1.2mまでの範囲にみることのできる、地山削り出しによる斜面部分に礫群が検出でき、これが葺石に相当すると考えてよい。葺石はすべてが花崗岩であり、1トレンチの石材に比してやや大きい。葺石の下段には横長の石材を並べて据えており、これが葺石の基底石、そしてこの部分が墳丘裾部に相当するのだろう。トレンチの土層をみると、基底石の上には地山と同質(明赤褐色バイラン土)で、固くしまりのある層(6層)が堆積しており、6層が流土であるという確証をつかめていない。従って、この部分が埋め殺されていた可能性も考えておきたい。基底石上は1トレンチにおける葺石と同様、斜め方向に石積みの目地が走るが、石積みの乱れている葺石の上半部では墳丘ラインに対し、それが平行になっている。トレンチの中央に走る溝は擾乱であり、墳丘より先は地山の平坦面が続いている。

出土遺物(図8) コンテナ1箱程の遺物が出土している。すべてが埴輪片である。

#### 3トレンチ(図6、図版4上)

後円部の北西側、1段目のテラス部分に設定した長さ2m、幅0.5mのトレンチである。土層をみると、墳頂部削平の際のものと思われる約1mほどの流土があり、更に薄い暗褐色を呈する旧表土部分、そして6層までの墳丘からの流土部分と続き、その下に明赤褐色を呈する地山が現れる。トレンチ南東端には、この地山の上に礫が検出でき、これまでの所見を加味すれば、これは葺石に当たるものといえよう。地山は、この葺石部分から30cm程平坦に続いた後、墳丘裾に向けてなだらかに傾斜を始め、トレンチ際で再び30cm程の平坦面となる。斜面部分の比高差は40～50cm程度。尚、遺物の出土は無い。

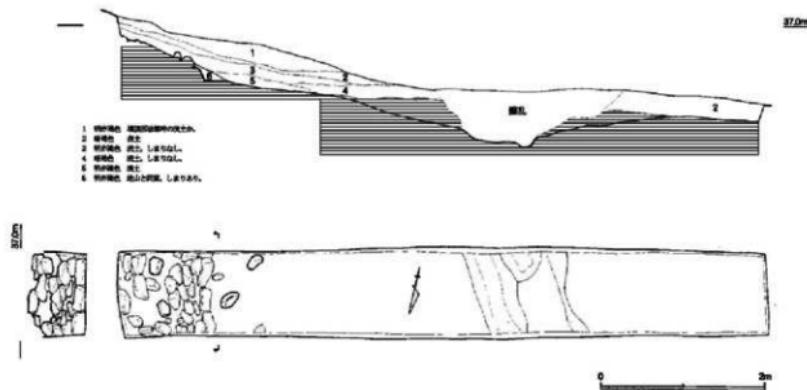


図5 2トレンチ (1/60)

#### 4トレンチ (図6、図版4下)

主体部である横穴式石室の主軸に沿って、後円部の頂上に設定した長さ5m、幅1.5mのトレンチである。20～30cmの表土を除去した後、墳丘盛土が現れ、更に掘り下げを進めると標高38.8mの地点で地山を検出することができた。横穴式石室の構築状況を加味すれば、土層に現れた墳丘盛土の工程は次のように整理することができる。

前工程 丘陵を平坦に整形し、石室壁体の基底石（腰石）を据える。

1工程 基底石上面の高さまで盛土を行う段階で、VI-1～6層が該当する。この盛土により基底石を固定する。石室石積みから2m程の位置まで盛土が行われる。

2工程 石室壁半ばほどの積み上げをする際の盛土を行う段階で、V-1～3層が該当する。1工程上に更に盛土を行うもので、盛土の高さは70cm程に達する。この工程の盛土は全体的に赤褐色を呈している。

3工程 2工程で積み上げた盛土の高さまで、広範囲に渡る盛土を行う段階。IV-1～23層が該当する。また、この工程はいくつかの小工程に分けることができる。2工程まで行った盛土の上に40cm程の盛土を行う。そして最終の小工程(IV-1・2層)では、石室奥壁より3m程離れた場所を土手状に盛り上げる。

4工程 3工程の盛土上に更に土を積み上げ、石室壁面上端にまでおよぶ盛土を行う段階。この工程の後に天井石を載せたのだろう。III-1～6層がこれに該当し、2つの小工程に分けることができる。小工程1(III-5・6層)は、3工程の最終段階において作り上げた土手部分を更に盛り上げるためのもので、そして小工程2(III-1～4層)は土手部分と石室石材とを充填するような形で盛土が行われる段階を指す。4工程における盛土はいずれも明赤褐色を呈し、地山と同質で各層の変化が少なく、層の細分が難しい。

1～4工程までの盛土はいずれも石室の構築に密接に関わっているものであり、細かい段階に分かれ、しっかりとした盛土が施されている。この段階までの盛土で石室の構築は完了しており、ここまで盛土がいわゆる「1次墳丘」に相当するのだろう。先にも述べたようにこの段階では石室天井石はまだ覆われていない。これは石室周囲のみがとり残され、周辺が掘り下げられるという墳頂部の削平状況から、石室上部の盛土部分にまでトレンチを設定しなかったため、詳細がよく分からなかったせいであるが、1～4工程にみら

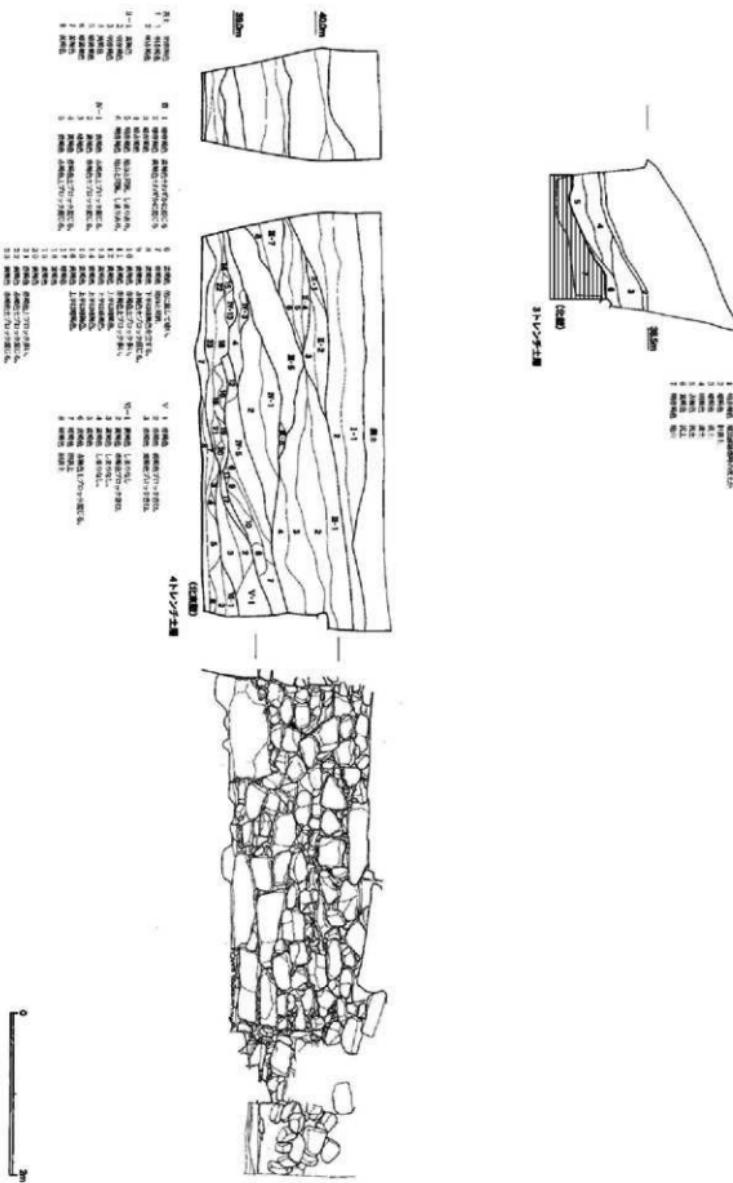


図6 3・4トレンチ (1/60)

れた緻密な盛土が天井石上部にまでおよんでいる可能性は高い。

- 5 工程 4 工程まで作り上げた埴丘を更に広げるため、外側に盛土をしていく段階。II-1~8 層が相当する。いくつかの段階に分けることができるが、これは順次上へと土を盛り上げていった結果であろう。4 工程とはほぼ同じ高さまでの盛り土を行う。範囲を限定されたトレンチ調査であったため、トレンチ部分より先の盛土は不明であるが、II-1~8 層から更に外側にも同様の盛土がなされた可能性 (I-3 層) も考えるべきであろう。
- 6 工程 4~5 工程における盛土上に土を盛り上げる工程。高さを考えれば石室天井石を覆うものこの段階にあたるが、先にも述べたように再考の余地がある。明赤褐色を呈する比較的均一な土で、層の細分ができない。石室構築後の盛土、いわゆる 2 次埴丘部分に相当するのであろう。

以上、4 トレンチにおける盛土の状況について所見を述べた。しかし、あくまでも 1 トレンチのみによる所見をまとめたものであり、再考の余地は十分にあることを断っておきたい。

出土遺物 4 トレンチにおいて遺物の出土は認められなかった。

### 3. 出土遺物

先にも述べたように、遺物はトレンチ 1・2 からの出土であり、トレンチ 3・4 では遺物は出土しなかった。埴輪が遺物のはほとんどすべてを占めており、それ以外では須恵器が 1 点検出されたに過ぎない。埴輪は大半が小片であり、筆者が確実に朝顔形埴輪と判別できる個体はなかった。また、接合できた個体も数少ない。以下、トレンチ毎に遺物の所見を述べる。

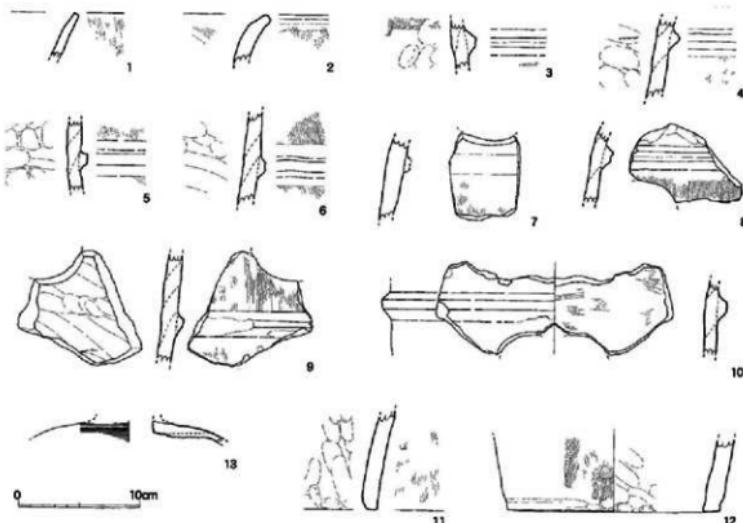


図 7 1 トレンチ出土遺物 (1/4)

### 1 トレンチ出土遺物 (図 7)

埴輪(1～12) 1・2が口縁部片、11・12が底部片、7～11が円形のスカシ孔を持つものである。いずれの埴輪片も外器面はタテハケの1次調整のみで、黒斑は認められない。内器面にはナデ調整が一般的で、部分的にハケ目が施されるもの(2・3)もある。焼成はやや甘く、外器面のハケ目が明確に残っている個体は少ない。色調は赤褐色～明赤褐色を呈する。いずれの個体も小片が多く、外形をある程度復元できたものは2点(10・12)のみである。10は胴部径cm、12は底径cmを測る。

1・2の口縁部片はいずれも上方に向けて緩やかに外反するもので、端部は肥厚しない。1・2とも外器面にはハケ目調整、2は内器面にも一部ハケ目が残る。突帯は断面が台形(4・5・9)もしくは突帯中央部がわずかに窪む弱いM字形(3・6・10)を呈するものが多く、M字形のもの(8)は少ない。

須恵器(13) 13は瓶類の頸部片である。外器面にはカキ目調整を施す。暗灰色を呈し、焼成は良好。

### 2 トレンチ出土遺物 (図 8)

埴輪(1～17) 2トレンチでは、出土遺物のすべてが埴輪片である。また出土量も1トレンチに比して2倍近い。1～3が口縁部片、17が底部片、4～9が円形のスカシ孔を有するものである。

1トレンチ出土の埴輪と等しく、いずれの埴輪片も外器面はタテハケの1次調整のみで、黒斑は認められない。内器面にはナデ調整が一般的で、部分的にハケ目が施されるもの(12・13)がある。外

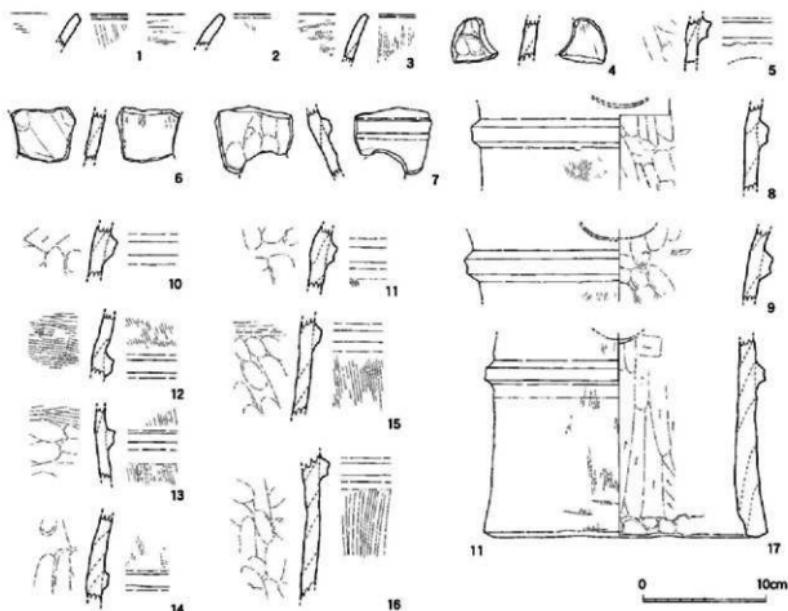


図8 2トレンチ出土遺物 (1/4)

形をある程度復元できたものは3個体のみ(8・9・17)で、8・9は胸部径それぞれcm, cm, 17は底部径cmを測る。

1~3の口縁部片は上方に向けて緩やかに外反し、端部は肥厚しないもので、いずれも外・内器面にハケ目調整の痕跡が残る。突帯はM字形、もしくは弱いM字形(17)を呈するものが大半である。1トレンチ出土のものとは、ごくわずかではあるが突帯形状に違いがある。

## IV まとめ

二度にわたる調査により、兜塚古墳に関する多くのことが判明したが、今後に向けての課題点、問題点も多い。これからも地道な調査、観察が必要であろう。ここでは、今次調査の成果を列記し、まとめとしたい。

### 墳丘形態について

図9に示したように、1・2トレンチによる後円部墳丘裾の位置は、前回調査において示された墳形推定ライン(杉山編1996)にほぼ等しいことが分かった。従って前回調査の所見通り、後円部径は44mに復元できる。しかし、肝心の前方部に関しては何も情報を得ることができなかった。この破壊の状況をみれば、広範囲にわたる面的な調査したり、切り落とされた前方部端の崖面を精査したりと、わずかな痕跡を拾い集めていくより無いだろう。前方部の形態、つまり兜塚古墳が前方後円墳であるのか、いわゆる「帆立貝形」を呈するものなののかは、今宿古墳群の変遷を当地域の歴史にどう位置づけていかを考える上でも極めて重要な問題である。今後の成果を期待したい。

### 墳丘の築造状況について

1・2トレンチ両者の所見をみても、兜塚古墳に周溝の痕跡は認められず、墳丘裾部より先は地山の平坦面が続いている。このような状況は近在する前方後円墳である飯氏二塚古墳と等しい。兜塚古墳では、1)まず、古墳築造に際して周囲を平坦にし、墳丘1段目および2段目の一部を地山の削り出しによって構築していること、2)そして後円部2段目を盛土によって造り出し、盛土に平行して横穴式石室の築造を行っていること、が判明した。この状況をみれば、「前方部」はその大半が地山の削り出しであろう。

### 古墳の時期について

新たに判明した事実ではなく、今回調査の出土遺物も集成編年(広瀬1992)8期という従来の年代観に矛盾するものではない。

## 文 献 一 覧

- 久住猛雄編1999『飯氏古墳群B群第14号墳調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集  
菅波正人編1997『谷上古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第499集  
杉山富雄編1996『兜塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集  
常松幹雄編1995『飯氏二塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集  
広瀬和雄1992『前方後円墳の畿内編年』『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社  
柳沢一男・杉山富雄2003『古墳の位置と周辺の遺跡』杉山富雄編『鷹崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集  
吉武 學編2003『飯氏二塚古墳2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第780集  
吉留秀敏2000『筑前地域の古墳の出現』『古墳発生期前後の社会像』九州古文化研究会  
米倉秀紀編1998『飯氏古墳群B群第14号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集

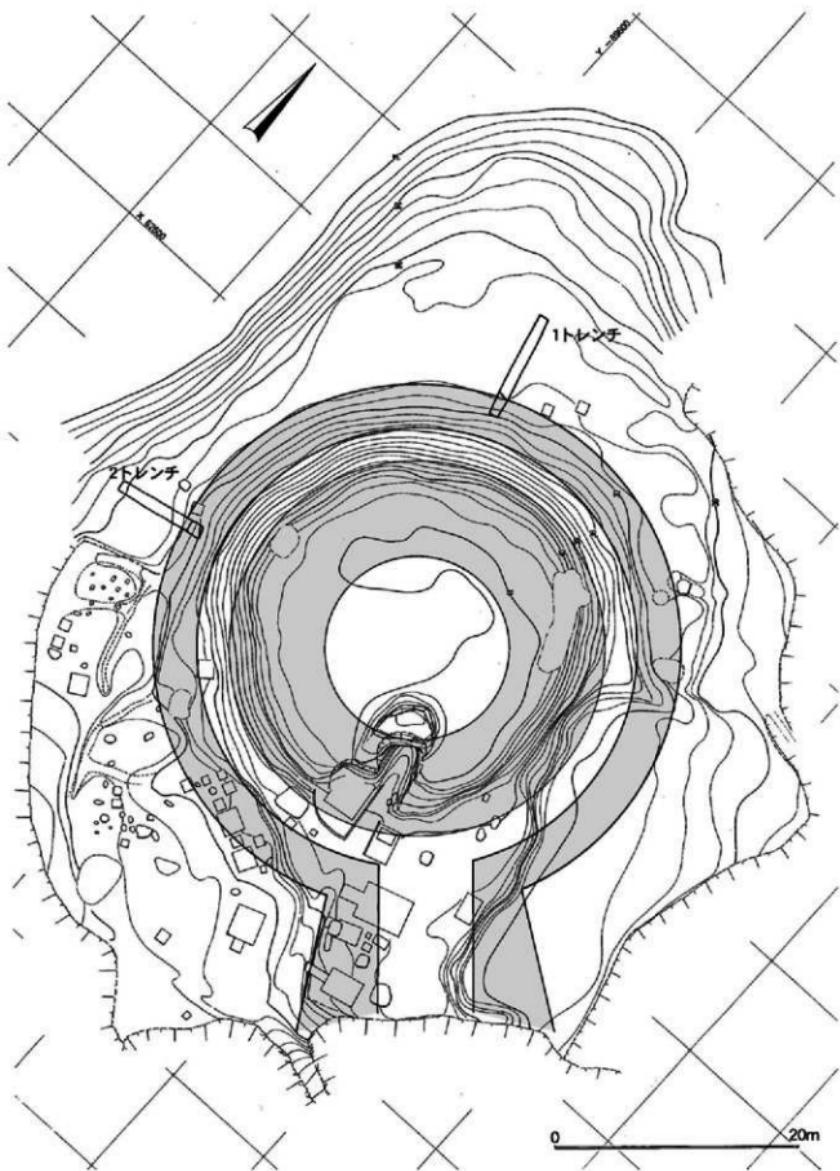


図9 調査結果（杉山編 1996に加筆）(1/400)



墳頂部現況（北東から）



3 トレンチ発掘前現況（北から）



1 トレンチ完掘状況（北から）



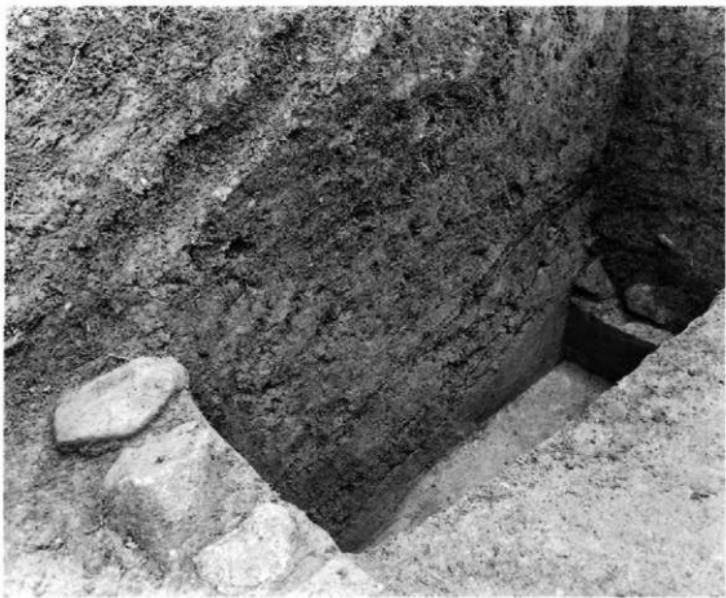
1 トレンチ検出薪石（北から）



2 トレンチ完掘状況（西から）



2 トレンチ検出葺石（西から）



3 トレンチ土層（西から）



4 トレンチ土層（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	かぶとづか							
書名	兜塚古墳2							
副書名	飯氏古墳群A-1号墳 墳丘確認調査							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第833集							
編著者名	藤富士 宽							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	ふりがな	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
兜塚古墳 (飯氏A-1号墳)	福岡県福岡市 西区大字飯氏 字松尾530他	40135	0325	33° 34' 57"	130° 14' 53"	20030613 20030708	25.4m <sup>2</sup>	重要遺跡 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
兜塚古墳 (飯氏A-1号墳)	墳墓	古墳時代	古墳	埴輪				

兜塚古墳2  
—飯氏古墳群A-1号墳 墳丘確認調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第833集

2005年(平成17年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号  
印刷 日の出印刷株式会社

